

# ぴか! 創

令和7年度 図工・美術部報 No.3  
発行：3月6日（金）



## 子供に学びをゆだねる

岡崎市現職研修委員会図工・美術部  
部長 長谷川 勝一

内外教育7297号（令和8年1月9日付）に、中教審初等中等教育分科会「総則・評価特別部会」の概要が記されていた。この部会では、次期学習指導要領総則に、「個に応じた学習過程の充実」を設けることが提案されたという。「個に応じた学習過程の充実」とは、教師は授業を単体で考えるのではなく、単元や題材の学習を見通して方略を考える。→子供は主体的・対話的に工夫しながら学ぶ。→学びを終えた子供は、その取組を振り返り、学びの過程を調整する、とする自己調整学習のことを示している。これらは、子供の主体的な学びが実現できたとき、「子供の学習過程は一様ではない」という事実が前提となっている。言うまでもなく、これは現行学習指導要領で既に取り組んでいることと重なる。今後はより鮮明に、より一層推進していくという決意に他ならない。教育現場はこの理念を十分に理解したうえで実践しているか、子供任せとならずに必要な支援や指導が十分に行われているか、という問いも込められていると推察する。教職経験が長くなるにつれて、若い頃の指導スタイルから脱却できずに苦しむ教師もいるであろうが、今、最も求められるものは教師自身の思考転換と新しい教育への対応力である。

かつての図工・美術科では「私はこんな作品を作らせたい」という教師の思いが強いあまり、メソッドを重視した画一的な作品づくりになったり、技能習熟に偏重した制作に陥ったりするケースが少なくなかった。これらの指導は教師主導になりがちであり、子供自身が考え、主体的に自己の取組を振り返り、学びを調整する活動にはつながりにくいと言える。そこで、今日の図工・美術科の授業（ここでは小学校高学年～中学生）を登山に例えてみる。

①子供は登りたい山を決める。

（主題・意図・目的→子供が登りたい山は一様ではない）

②頂上でどんな景色が見たいかを想起する。

（つくりたい作品のイメージ→子供が見る頂上の景色は一様ではない）

③どの道を進むか、どんな登り方をするかを選ぶ。

（子供に学びをゆだねる→子供の学習過程は一様ではない）

④一日進むごとに、歩んだ行程を振り返る。頂上まであとどれくらいかを見通す。このまま登るためには何が必要か、このまま進んでよいか、違う道を選ぶか。

（学びの調整・次への課題づくり→子供の歩みと課題は一様ではない）

\*\*\*\*\*

「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」

図工・美術科で題材全体を見通すにあたり、この三つは特に明確にする必要がある。そのうえで、子供に学びをゆだね、個別最適な学びの実現に向け、継続した支援を行う。この視点に立った実践が更に活発となり、図工・美術科に魅力を感じる子供が一人でも多く増えることを願ってやまない。

# 今年度の指導員訪問を振り返って

本宿小学校 浅井 優子

本年度の図工・美術部の重点テーマを「つくりだす喜びを味わい、豊かに表現したり、見方や感じ方を広げたりする授業」とし、指導員訪問を行った。研究授業では、子供の「やりたい」という思いを引き出すための教師の手だてが多く見られた。一方で、子供の困り感に気付かず、教師の思いが先行してしまう授業もたびたび見られた。深い学びを実現するためには、教師が本時で育みたい資質・能力を明確にし、その力を育むために「どの題材で」「どう学ぶのか」を試行錯誤することが必要である。また、ただ知識を教えるのではなく、「針金を重ねてねじるとつながった」「水を混ぜると色が淡くなった」など、子供の実感を伴った気付きを増やし、その表現方法がどんなイメージを表現するのに適しているかと問いかけることで造形的な見方・考え方を深めることができる。そして、教師が子供の見つけた表現を受け止めて声掛けをし、価値付けることを大切にしたい。

北中学校 堀口 宏章

本年度の訪問では、多くの学校で見通しづくりや仲間との対話を取り入れ、材料や技法の選択理由を共有するといった、子供が主体的に学ぶための工夫が随所に見られた。一方で、対話の焦点が曖昧なまま交流が進んだり、造形的な視点に基づく言語化が十分に促されなかったりする場面も見られ、学びの深まりに差が生じていた。また、環境や材料を工夫する授業がある一方で、子供の技能や経験に比して題材の難易度が高く、達成が難しくなるケースもあり、教材研究や題材設定の重要性を改めて実感した。

鑑賞の授業では、子供が多様な視点に気付けるような手立ての工夫が見られたものの、考えの根拠を問う働きかけが弱く、印象にとどまる記述も多かった。表現と鑑賞の活動を往還させ、造形的な視点に基づく対話を積み重ねることが今後の課題である。来年度も、子供の感性や発想を大切にしながら、教材研究の充実を図り、「つくること」と「見ること」の両面で学びの深まりを実現する図工・美術科の授業を目指していきたい。

## 第63回造形おかざきっ子展へ向けて

第63回展のテーマ

「ようこそ！ワクワクみらいパークへ」

【キーワード】 みらい

【方向性】 岡崎の町をベースに、未来テクノロジーや自然との共生を子供の自由な発想で表現できる。また、SDGsや環境問題、AI、ロボットなど現代的なテーマと結びつけやすい。

【作品例】 未来の岡崎城や町並みを表現

ロボットや乗り物の立体作品

「空飛ぶ学校」「水上都市などのジオラマ」

